

国立国語研究所学術情報リポジトリ

詩を通してみる中学生の日常の捉え方

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2024-11-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 恵梨, 角谷, 昌範 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000374

詩を通してみる中学生の日常の捉え方

加藤 恵梨 (愛知教育大学)

角谷 昌範 (愛知教育大学附属岡崎小学校)

How junior high school students perceive everyday life through poetry

Eri Kato (Aichi University of Education)

Akinori Sumiya (Okazaki Primary School Affiliated to Aichi University of Education)

要旨

詩は発達段階に応じて、言葉遊びとして響きやリズムを楽しんだり、自分の感じたことを率直に表現したりするのに適した形式であると先行研究で指摘されている。確かに、中学生の書いた詩と小学生の書いた詩を比較すると、日常の捉え方やその表現の仕方が異なっている。そこで本研究では、愛知教育大学附属岡崎中学校の年間文集『つくし』の67号(2019年度)～71号(2023年度)に収録されている詩(1年生80編、2年生81編、3年生81編)を調査資料とし、中学生が日常をどのように捉え、表現しているのかを明らかにする。また、それらを愛知教育大学附属岡崎小学校の文集『ひばり』に収録されている詩と比較し、違いについて述べる。

1. はじめに

詩について、浜岡・池田・山元(2018)は、「発達段階に応じて、言葉遊びとして響きやリズムを楽しんだり、自分の感じたことを率直に表現したりするのに適した形式」(p.9)であり、「論説的な文章のように構成や内容に型があるものに比べて、詩にはそういった制約がない。その分だけ表現するにあたって、自分の言葉と向き合わざるを得ない場面を作り出すことができる」(p.9)と指摘している。また、二瓶・青木(編)(2022)においても、「感情や思いを直接的に表現し、前後の文脈を断ち切った剥き身の言葉を用いる詩は、まさに自由そのもの」(p.226)であると述べている。このことから、小学生および中学生は、詩に思いや考えを自分のことばで率直に表現していると考えられ、児童・生徒がどのような感情や思いを抱いているのかを理解する資料として詩は適していると考えられる。

また、小学校および中学校で詩創作という学習活動がどのように行われているかについては、「小学校三・四年生の言語活動例に挙げられているが、教科書には『毎日の生活の中での出会いや発見、感動を、詩にしてみましよう。詩は、短い文で、そのときの思いを言葉にしたものです』(光村『国語四下』)と示されているだけである。中学校の教科書においても、大半は、『日常生活の中で発見したこと』を題材として『リズムは整え、比喩を使って詩にしてみよう』と呼びかけ、数例の生徒作品を挙げるに留まっている。いずれも、担当教員の指導に一任している状態である」(田中 2023: 16-17)と説明されている。このように、児童・生徒は担当教員の指導を受けながらも、詩の題材として日常生活での出会いや発見を自身で設定していると考えられるが、「学習者は自由にテーマを設定することに対し難しさを感じる人が多い」(浜岡・池田・山元 2018: 13)ことも指摘されている。

そこで本研究では、愛知教育大学附属岡崎中学校の年間文集『つくし』を調査資料とし、中学生が日常生活をどのように捉え、日常生活での出会いや発見をどのように表現しているのかを明らかにすることを目的とする。また、中学生の書いた詩と小学生の書いた詩を比較することで、日常の捉え方やその表現の仕方が学年によってどのように異なっているの

かについて考察する。

2. 調査資料について

本研究では、愛知教育大学附属岡崎中学校の年間文集『つくし』の67号（2019年度）～71号（2023年度）に収録されている詩（1年生80編、2年生81編、3年生81編の計242編）を調査資料とする。また、加藤（2023）をもとに、愛知教育大学附属岡崎小学校の年間文集『ひばり』の70号（2019年度）～74号（2023年度）に収録されている詩（1年生31編、2年生31編、3年生23編、4年生45編、5年生48編、6年生30編の計208編）についても調査する。

3. 小学生と中学生の詩の比較

加藤（2023）は、愛知教育大学附属岡崎小学校で発行している児童文集『ひばり』に収録されている詩を調査資料とし、学齢別の特徴について考察している。以下では、加藤（2023）で述べられている「動物」という身近な存在、「夏」という季節をテーマにしている小学生の詩の分析結果と、『つくし』の中で「動物」と「夏」をテーマにして書かれている中学生の詩を比較し、小学生と中学生の「夏」および「動物」の捉え方およびそれらの表現の仕方の違いについて考察する。

3.1 「動物」をテーマとした詩の特徴

はじめに、加藤（2023: 196-197）にもとづき、動物をテーマとした小学生の詩の特徴について述べる。

まず、低学年（1・2年生）で動物をテーマとする際は、次の(1)のように、その姿やそれに対する書き手の感情が描かれているという特徴がみられる（加藤 2023: 196）。

(1) ペンギンが すき

とっても かわいい

（タイトル「大すきだから」、第一連（全六連）、小学1年生、加藤（2023: 196）の(7)）

続いて、中学年（3・4年生）では次の(2)のように書き手が視覚や聴覚で捉えたことだけでなく、触覚などの他の感覚にもとづくものや、動物の視点に立って考えたことを述べるなど、対象をよく観察し、描写している（加藤 2023: 196）。

(2) 犬は体がふわふわして きもちいい

犬の頭をじっと見ると

ワンワン おこる

さんぽすると

しっぽを ふりふり うれしいな

（後略）

（タイトル「かぞくの犬」、第一連（全一連）、小学3年生、加藤（2023: 196）の(9)）

さらに、高学年（5・6年生）では動物を単に観察してその様子を描写するのではなく、次の(3)のように動物について考えたことや疑問に思ったことを述べたり、心理的な面からその動物を描写したりと、考察をもとに記述している（加藤 2023: 197）。

(3) メダカはどうしてたまごを食べるんだろう

僕だったらたまごを守っていたのに

(タイトル「メダカと僕」、第一連(全五連)、小学5年生、加藤(2023:197)の(11))

以上のように、小学生の詩では動物を観察してその様子を描写したり、それについて考えたことや疑問に思ったことについて述べている。

一方、中学生では、次の(4)や(5)のような詩がみられる。

(4) メダカも戦争している

人間のように

あんなにも小さい水槽で争っている

どんな世界にも争いはあるんだな

メダカと人間は

同じなのかもしれない

「もっとみんなで仲良く暮らそうよ」

「平和な世界にしようよ」

私は水槽に向かってつぶやいた

(タイトル「水槽戦争」、第五連、第六連、第七連(全七連)、中学1年生、つくし69号)

(4)はメダカについて書いたものである。上で見た小学校高学年の詩である(3)もメダカについて書いたものであるが、(3)はメダカと書き手自身を比較し、思ったことについて述べていた。一方の(4)は小さい水槽で争っているメダカの観察を通して、戦争の絶えない人間の社会を憂い、「もっとみんなで仲良く暮らそうよ」「平和な世界にしようよ」と述べているように、世界が平和な社会になることを願っている。小学生の詩では動物を観察してその様子を描写したり、それについて考えたことや疑問に思ったことについて述べていたが、中学生では動物の観察という身近なことから世界情勢といった広い事物へと目を転じ、それについて考えたことを記述している。

また、次の(5)のように「カエル」というタイトルではあるが、「井の中の蛙大海を知らず」という故事成句をもとに、書き手自身をカエルに喩え、「井の中の蛙」であるという思いから、成長のために「大きな海に向かって」チャレンジしようという決意を述べているものもみられる。

(5) 井の中の蛙大海を知る

あの日から一步を踏み出した

挑戦するって

こんなに楽しかったんだ

たとえいい成績がとれなくなっても

たとえ人に馬鹿にされたって

自分を成長させる

最高の手段

それが挑戦

カエルは大きな海に向かって……

(タイトル「カエル」、第五連(全五連)、中学2年生、つくし71号)

(5)以外にも自身を「井の中の蛙」に喩えている詩がもう一編みられた。また、中学生の詩では、今後の決意や意気込みについて述べる際にも表立った表現はみられず、(5)や次の(6)のように静かに決意が述べられている。一方、小学生の詩では次の(7)のように今後に向けて「がんばるぞ」といった言葉がよくみられるという違いがある。その理由として、小学生は思いを伝える語彙が少ないことと、中学生が詩を書く場合、読み手を意識し、自身の覚悟を表すために様々な表現を試してより良いものを用いるため、新たな言い回しを手に入れることができるということがあげられる。

(6) ぼくはこう考える

達成した人にしかわからない景色がある

それはどんなものにもあると

諦めればもう終わり

この思いを大切に

(タイトル「山と心」、第五連、第六連(全六連)、中学2年生、つくし67号)

(7) 夏休みは楽しいな

もうすぐ花火のように消えて終わってしまう

来年に向けて二学期からがんばるぞ

(タイトル「花火」、第三連(全三連)、小学5年生、ひばり71号)

3.2 「夏」をテーマとした詩の特徴

次に、夏をテーマとした詩の特徴について、まず加藤(2023: 197-198)にもとづき、小学生の詩の特徴について述べる。

低学年(1・2年生)では、「セミ」や「かきごおり」といった具体物を焦点化し、次の(8)のようなセミの鳴き声やかきごおりを食べるときの音を表現することで夏休みを表そうとしている(加藤2023: 197)¹。

(8) ミーンミーン セミの声

夏休みの 朝が 来た

(タイトル「ぼくの 夏休み」、第一連(全十連)、小学2年生、加藤(2023: 197)の(14))

続いて、中学年(3・4年生)では次の(9)のように、夏の特徴的な事物について視覚や聴覚で捉えたことをそのまま述べるのではなく、それらをよく観察し、それらから連想したこ

¹ 佐々木(2013: 234)は、小学2年生の児童に「夏」といえば思い出す「もの」や「こと」を、思いつくままに発表させると、「プール」「かき氷」「すいか」「夕立」「入道雲」「風鈴」「アイスクリーム」「麦わら帽子」「海水浴」などがあがったと述べている。

とや、その結果生じることを想像して述べている（加藤 2023: 198）。

- (9) 暑いなかでもせみはなく
ひっそりとくらしている
空へ羽ばたく
どこまでも羽ばたく
まるで世界旅行へ行くかのように
(後略)

(タイトル「暑い夏」、第一連(全一連)、小学4年生、加藤(2023: 198)の(16))

さらに、高学年(5・6年生)では次の(10)のように、具体的な事物によって夏を表すのではなく、夏についての書き手の思いや考え、心に残っていることをもとに表現している(加藤 2023: 198)。

- (10) 夏がきた
いっぱい待った夏がきた
たくさんやりたいことばかり
頭にうかぶ夏休み

(タイトル「何しよう」、第一連(全五連)、小学5年生、加藤(2023: 198)の(18))

以上のように、小学生の詩では具体的な事物によって夏を表したり、夏についての書き手の思いや考え、心に残っていることをもとに表現している。

一方、中学生では次の(11)や(12)のような詩がみられる。

- (11) 少しくたびれたクッションの上
カタカタと音をたてながら
パソコンを操作する
(中略)
エアコンから吐き出される空気が
冷たく、尖っている
窓の外には青々とした空
全てを溶かすような太陽の光
テレビはいつのまにか
台風情報のニュースに変わっている
何気なく過ぎてゆく夏のひととき

(タイトル「夏」、第一連(全一連)、中学3年生、つくし 69号)

(11)では、家の中で過ごす書き手の様子や部屋の窓からみえる外の様子を描写しているのであるが、その中で、「エアコンから吐き出される空気が／冷たく、尖っている」「全てを溶かすような太陽の光」などの夏特有の事象に触れることで、夏のひとときをあらわしている。このように、中学生は夏についての詩を書く場合であっても、小学生のように具体的な事物によって夏を表したり、夏についての書き手の思いや考え、心に残っていることをもとに表現するのではなく、何げない日常生活の中に垣間見える夏特有の事象を描くことで夏を表現している。日常の一つとして捉えているからこそ、説明的な文になっていると考えられる。

また、次の(12)のように、夏の暑さから地球温暖化という問題について考えているものもみられる。

(12) 夏

毎年やってくる
一段と暑くなる
(中略)
地球温暖化が
日々進んでいる
それを毎年実感していく
梅雨も早くやってきて
異常な雨を降らせて
過ぎ去っていく
まるで地球が熱を出し
体温が上がっていつているようだ
涼しく青い夏や地球を
取り戻すことができるのは
今の僕たちにかかっている
僕たちがどう行動するかで
これからの夏は
作られていくだろう

(タイトル「夏」、第一連(全一連)、中学2年生、つくし70号)

(12)は、はじめに「夏／毎年やってくる／一段と暑くなる」と述べ、その原因は「地球温暖化が／日々進んでいる」ことにあり、最後に「涼しく青い夏や地球を／取り戻すことができるのは／今の僕たちにかかっている／僕たちがどう行動するかで／これからの夏は／作られていくだろう」と考察している。中学生になると、世の中に目を向け始める。そのような発達段階だからこそ、詩を現実世界とつなげ、このような表現をするのだと考えられる。

以上のように、中学生になると、小学生のように「夏」をイベントとして捉え、夏の特徴的な事象や出来事を通して描き出すのではなく、日常の一つとして捉えたり、夏の暑さを取りあげ、その背後にある問題点について考えているものがみられる。

3.3 小学生と中学生の詩の比較

以上の考察をふまえ、小学生と中学生の詩について比較する。小学生の書いた詩に比べ、中学生の書いた詩はどこか面白みに欠けているように感じる。その要因は、小学生、特に低学年が書いた詩は児童が感じたことを率直に、主観的に表現しているため、大人が思いつかないような児童独自の日常の捉え方や新規な表現がみられるのに対し、中学生の詩では日常を客観的に俯瞰的に捉えられるようになるため、冷静で、大人と同じような日常の捉え方や比喩および慣用表現が使われていると感じるからである。しかし、そのような日常の捉え方や比喩表現などを使いこなせるようになることこそが成長の証であり、そういった段階を経て、より一層多角的な視点をもつことができ、豊かな表現を生み出すことができるのであると考えられる。

4. 中学生の詩の特徴

3節での分析をふまえ、以下では中学生の詩の特徴について述べる。結論を先取りして述べると、中学生の詩では、1. 日常を多角的に捉えていること、2. 日常の物事を正しく判断し、本質を捉えていることという特徴がみられる。

4.1 日常を多角的に捉える

4.1.1 物事の表面にあらわれていない部分を捉える

(13) 京都は

とてもきれいで
いろいろなものがあります
でも それをきれいにみせる人がいるんです
その大切な人のことを思いながら見てみれば
またちがうけしきが
見えてくる

(タイトル「京都には」、第一連(全一連)、中学1年生、つくし67号)

(13)では、京都について「とてもきれいで／いろいろなものがあります」と紹介した後に、「それをきれいにみせる人がいるんです」と述べているように、京都のきれいさの背後にある人々の努力に目を向けている。

(14) 学校は成長の場所

生徒たちは自分自身を発見する
自信をもち、目標を設定する
未来を切り開くために

学校は希望の場所
生徒たちは夢を見る
自分の才能を発見、発揮し、
世界を変えるために

(タイトル「学校」、第四連、第五連(全五連)、中学2年生、つくし71号)

(14)では、学校が単に教育を受ける場所であるだけでなく、生徒たちが未来を切り開くために成長する場所であったり、世界を変えるための希望の場所であったりすると述べている。

以上のように、中学生では、ある事物・事象について実際に見たり聞いたりしたことなどを直接的に描写するのではなく、その背後にある事柄に目を向け、それについて考えたこと述べている。

4.1.2 物事を俯瞰的に捉える

(15) 人に会うと他人の価値観に出会う

通学する子どもを笑顔で見守る人
子どもに道をふさがれて嫌そうな顔をする人

人の波をかき分けて周りを見ない人
周りを気にせずにポイ捨てる人

他人に学ぶ
理想の私になりたい

(タイトル「他人に学ぶ自分」、第二連、第八連 (全八連)、中学3年生、つくし 67号)

(15)は周りにいる人たちを俯瞰的に観察し、「通学する子どもを笑顔で見守る人／子どもに道をふさがれて嫌そうな顔をする人」などさまざまな価値観があることを述べた上で、「他人に学ぶ／理想の私になりたい」とあるように、他人の行動から学ぼうという姿勢がみられる。

(16) はやり病で世界が変わって
どうやら狭くなったようだ
どうやら遠くなったようだ

買い物をする人たちは
行儀良く間隔をあけて並んで
口をあけることなく帰っていく
海の中みたいに静かだ

こんなに世界が狭くなっても
こんなに人との距離が遠くなっても
明けない夜はないはずだから
やまない雨はないはずだから
きっと来年は・・・

(タイトル「来年また」、第一連、第四連、第六連 (全六連)、中学3年生、つくし 68号)

(16)は、コロナで変化した日常生活や人々の様子を俯瞰的にみて、世界が狭くなった、人との距離が遠くなったと表現している。

以上のように中学生では、俯瞰的に物事を捉え、それらをよく観察して記述しているという特徴がみられる。中学生になると、世の中をよくみるようになり、批判的にみる目も育つ。そのような成長段階であることも影響していると考えられる。

4.1.3 自身を客観的に捉える

(17) 私、
「私」とはなにか
十四年と約七ヶ月生きてきた中
私は何を学んだ
そして「私」はなんのために生きて
私はなんのために考えるのか

そんな事を考える今日このごろ

一度見直そう人生を

(タイトル「私とは何か」、第一連、第二連 (全八連)、中学3年生、つくし71号)

(17)は、書き手自身の14年間を振り返って「何を学んだ」のか、また、「なんのために生きて」「なんのために考えるのか」について問うている。このように、自身の人生を客観的に捉え、見直そうとしている。

(18) 昔と今とでは変わっているものがある

昔は何かをもらったり

どこかに行かせてもらったり

何かをしてもらっている

今は目標を達成したり

喜んでもらったり

何かをしている

大人になるにつれて

どんどん変わっていくだろう

(タイトル「心の移り変わり」、第七連 (全七連)、中学2年生、つくし70号)

(18)は書き手が自分自身の昔と今を客観的に比較し、どのような変化があったかについて述べている。

中学生の詩では自身を客観的に捉え、昔と今とではどのような変化があったか、どのような成長があったかについて述べている。そのため、(17)では「人生」、(18)では「大人」ということばが使われている。キャリア教育や進路指導で将来を考える機会が多いことも影響していると考えられる。

4.2 日常の物事を正しく判断し、本質を捉える

4.2.1 物事をデータや情報にもとづいて認識する

(19) (前略)

一分間に

東京ドーム二. 四個分の速さで

森が消えるとどうなる

生き物が住めなくなる

洪水が起きる

温暖化が進む

人に害が出る

(後略)

(タイトル「人と木」、第一連 (全一連)、中学3年生、つくし70号)

(19)は世界の森林が失われているスピードの速さとそれによって引き起こされる問題に

ついて述べているのであるが、その際に「一分間に／東京ドーム二、四個分の速さで／森が消えるとどうなる」というように、データにもとづき、森林伐採の問題を認識しようとしている。

(20) 広島、長崎への原爆投下
貧しい生活の中でも輝き
精一杯生きていた人々
大勢の人々が死に
燃えさかる炎の中で
一瞬のうちに 全てが破壊された
命は一つ 最高の人権
誰のものでもない
今ある町並みが違ってははずだ

これから私たちはどんなふうに
戦争と向き合うのだろうか
昭和 平成 令和
戦争を実感していない人が増え
戦争が「そんなこと」で扱われないように
終戦記念日を大切に
平和を希求する精神
つなげていきたい

(タイトル「つなげたい思い」、第四連、第六連(全六連)、中学3年生、つくし67号)

(20)は、戦争について実際に自身の目で見たり体験したりしていなくても、戦争によって広島、長崎に起こったことについての知識にもとづいて考え、今後の戦争への向き合い方について述べている。

以上のように、中学生は、実際に自身の目で見たり体験したりしていなくても、データや得た知識によって広い世界を認識したり、未来について考えたりしている。

4.2.2 実体のない抽象的な物事を具体的に捉える

(21) 人の心は
いろいろな色が混ざっている
赤、青、緑
いろいろな色の人がいる
すっごく明るいときもあれば
すっごく暗いときもある
まるでゲリラ豪雨が降るみたいに
他の人の色なんて
そんなのまったくわかんないけど
そんなのまったくわかんないけど

(後略)

(タイトル「人の心」、第一連 (全一連)、中学2年生、つくし70号)

(21)は捉えどころのない人の心を、「赤、青、緑」といった色に喩えることで、その多様性や複雑性についてわかりやすく表現しようとしている。

(22) ランダムって面白い

意味も無く只管に数字を描いてくれる

規則性や纏まりは無いが

ランダムならでは人には造れない

不思議な所がある

(中略)

ランダムなんてものは ない

何故なら この世に有る全ての選択は

何処かで誰かが悩み

迷って

考えて

決めた一つの答えなのだから

(タイトル「ランダム」、第一連 (全一連)、中学1年生、つくし71号)

(22)はランダムという抽象的な概念について考察し、全ての選択は人々の決めた一つの答えであると考え、「ランダムなんてものは ない」と結論づけている。

以上のように、中学生では、実体のない抽象的な物事をテーマとして取りあげ、それについて具体的に捉えようとしている。

5. おわりに

本研究では、詩は児童・生徒が自身の感じたことを率直に表現するのに適した形式であるという考えから、中学生の書いた詩と小学生の書いた詩を調査資料とし、児童・生徒の日常の捉え方やそれらの表現の仕方がどのように異なっているかを明らかにすることを目的とした。

まず、「動物」という身近な存在、「夏」という季節をテーマとしている小学生の詩の分析結果と、中学生の詩を比較し、小学生と中学生のそれらの捉え方および表現の仕方の違いについて考察した。その結果、小学生の詩では動物を観察してその様子を描写したり、それについて考えたことや疑問に思ったことなどについて述べていたが、中学生では動物の観察という身近なことから世界情勢といった広い事物へと目を転じ、それについて考えたことを記述していた。また、中学生になると、小学生のように夏をイベントとして捉え、夏の特徴的な事象や出来事を通して描き出すのではなく、日常の一つとして捉えたり、夏の暑さを取りあげ、その背後にある問題点について考えたりしているものがみられた。さらに、小学生と中学生の詩について、小学生の書いた詩に比べ、中学生の書いた詩はどこか面白みに欠けているように感じられると述べ、その要因は、小学生、特に低学年が書いた詩は児童が感じたことを率直に、主観的に表現しているため、大人が思いつかないような児童独自の日常の捉え方や新規な表現がみられるのに対し、中学生の詩では日常を客観的に俯瞰的に捉え

られるようになるため、冷静で、大人と同じような日常の捉え方や比喻および慣用表現が使われていると感じるからであると指摘した。しかし、そのような日常の捉え方や比喻表現などを使いこなせるようになることこそが成長の証であり、そういった段階を経て、より一層多角的な視点をもつことができ、豊かな表現を生み出すことができると考えられると記述した。

上の分析をふまえ、中学生の詩について、「1. 日常を多角的に捉える」「2. 日常の物事を正しく判断し、本質を捉える」という特徴がみられることを述べた。「1. 日常を多角的に捉える」というのは、「①物事の表面にあらわれていない部分を捉える」「②物事を俯瞰的に捉える」「③自身を客観的に捉える」に下位分類することができ、「2. 日常の物事を正しく判断し、本質を捉える」というのは、「①物事をデータや情報にもとづいて認識する」「②実体のない抽象的な物事を具体的に捉える」に下位分類することができることを示した。

今後は、中学生の学年別の詩の特徴や表現技法の違いについて明らかにしたいと考える。

謝 辞

本研究は、令和6年度愛知教育大学学長裁量経費（連携推進分野）の助成を受けたものである。

文 献

- 加藤恵梨 (2023). 「児童詩における学年別の特徴の分析」『第167回 日本言語学会大会予稿集』, pp.193-199.
- 佐々木豊 (2013). 「子どもの詩の書かせ方—児童詩教育私論を求めて—」『太成学院大学紀要』15, pp.231-238.
- 田中宏幸 (2023). 「国語科教育における「書くこと」の学習指導—中学校国語教科書における「書くこと」教材の特徴と実践上の課題—」『日本語学』2023年冬号, 第42巻第4号, pp.12-19.
- 二瓶弘行・青木伸生 (編) (2022). 『小学校国語「書くこと」の授業技術大全』明治図書
- 浜岡恵子・池田匡史・山元隆春 (2018). 「詩の創作を通して思考力を高める指導法の研究—『詩人の時間』を実感する学習—」『中学教育：研究紀要』49, pp.9-15.